

「命の布施」

国島 恵遠

最近のニュースでイタリアの豪華客船が座礁し、何人もの乗船客が亡くなりました。

まだ海洋の真ん中でなく、タイタニック号ほどの犠牲者が出なかったことは、不幸中の幸いでした。

紀元前3世紀のギリシャの哲学者、カルネアデスが出した問題があります。

これは「カルネアデスの船板」という話です。広大な海の上で難破し投げ出された漂流者が、一人しか掴まれない板を他の漂流者から奪い、自分が助かるのは正しいかそうでないかというものです。先に板に掴まっている者が助かる権利があるのか、後からきた者の権利が認められるかということです。

法律では、後からきた者が、自分が助かりようとして先に掴まっている者から板を奪い取った場合は「緊急避難」とされ、先に掴まっている者が後からきた者を見捨てた場合は「正当防衛」になるそうです。分かり易く言えば、「緊急避難」は自分の命を守るために止むを得ずにしたことで罪にはならない。「正当防衛」の方は差し迫った危険に対して、自分の命などを守るためにしたことで罪にはならないということです。

法律的にはこのように扱われますが、さて、仏教ではこの問題をどう考えたらよいのでしょうか？もしそのような状況にあれば冷静でいられる人は先ず無いでしょう。自分の命がどうなるのかわからない恐怖と、何としても助かりたいという思いが混じり合い、ゆっくり考える余地もないに違いありませんが、そのような状況であっても、お互いが自分の命を投げ出して助かってほしいというような譲り合いの姿が現れるのを期待するのが仏教の考え方でしょう。

でも、自分の命の布施（喜捨）がそのような極限の条件の下で本当にできるのかどうかというのが一番の問題です。

普段の生活の中では人のためと思い、いろいろな場面で自分の事を後回しにして、他人からは喜ばれることもあります。いざ自分の命が危険に曝されたとなるとどうでしょうか？自分の命を喜んで捨てられるのでしょうか？

皆さんも一度、そのような状況を自分に引き当ててみた時どのように考えますか？